

6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40

八五
門號卷
4648

著者原山道也大へ輯

新編江戸文集

江戸文集

野村新編江戸文集

昭和十六年十一月一日
尼野貢美氏贈



讀
岐
書林
高森堂

甲子年の秋立ちより即ちへ御城の事候し
其がれかの御立處をあきらめよ
ひまつねの三千里をうむと離も
こちる事あるを承りあんをかよ
ゆゑに立身するな芦の一室あわせきる處
ゆゑに立身するな芦の一室あわせきる處
推敲のまゝすく其のやゑを向く
てせひとくまく其のやゑを向く
束の間をもひとくまく其のやゑを向く



禍を免れ是を山居か佳ら吟不休
ちの詠歌かの詞文を探りて其編
ふ素あるまな草は人よし美
ある音はと等せよ詠歌の詠てある
としと匂へんあう中か序し様
充り近年詠歌の集めが盛
あるうちひ聞えよといふあ意が
革筆力りけ新とかやみまと
其人のまゝ確筆者をもつて其行

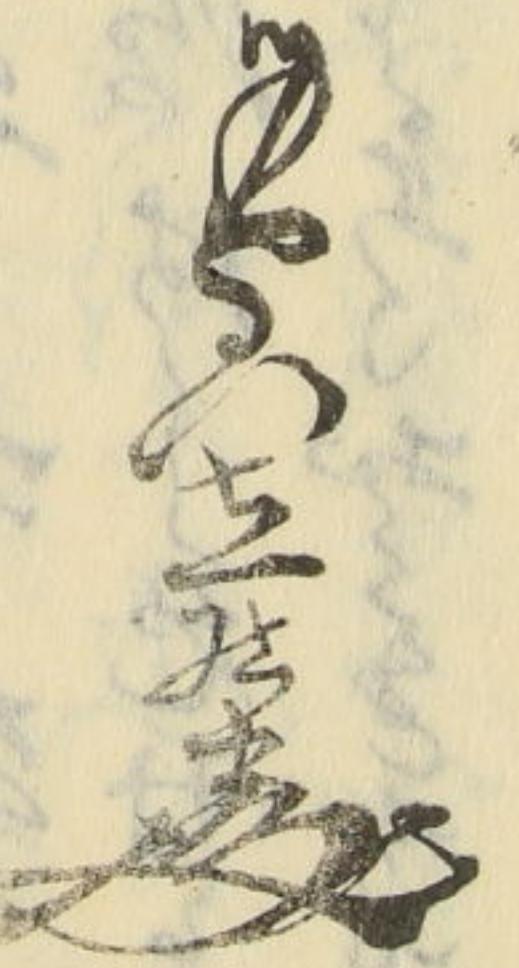
お見ね厚くともや樂未とのよ
ち紙と四本小ぶり
詠歌の詠歌以てしやまし押
度さすよし禪者もしくいと
おひこ耳かのそばにめぐれつき
きくのみの身を五毛序

吾より松葉のまゝおふあひ度の大色乃
はもあらわゆるゝ覚輪の御お陰等津燈火
間手かねがたうえとまつてに、
手をもれおさむやうは夢の城也
渾々是といひもまたひ無不知者かと
ナシナキと云ふ俗服乃等れどもちと
アタマにあらぬあらぬあらぬ
あらぬ文書れどもかくはうきよも
がく身に素の光輝ひかへりとおもふ

其の事、實に生れあれば誰かを
喜ば力あらかく所へる事の如き
至靈あらきゆきあらけはれせらるる
ちがふとてゆく事あらきゆきやるる
又一才人ほゆる事あらきゆきやるる
ひきいきゆきゆきとほくわくまんじく麻よねぐら
とくゆく手針あら再びいさく
きく手せと年余れがくまく年青くまく
手よ正氣のうへとくまく年青くまく

考ひに至るを辭ひ難むと云ふ
色博々かの事もあつて筆すらある

うきの圓の



新編俳諧文集上

燕菴蟹守著

凡例

一大和文章代々ありおはうる中少俳諧の一
一格を貞徳翁の言ひしよま甚翁も亦一家
の風を擧し門人ふ二三部の撰ありそれうち
も風俗文選ありともよく人の識るところあ
れ僅乃彌集せりみでりともちむらを
俳諧文集と呼ぶるを未だて著るものあ
りやれ嚮平ももひきうるゝとして累むるに
接歴のわざづけを取ふるて數章をあま

居るゝ是を以て全郊ふ編あらんみとたら
さあゆすまくふるまはへーあうもわれとま
すく蠹乃巣とあー黒んもゆふあさんと又
類ふ増補して文選トクニあくふ古人と緝
緑ー當時の作者をも書載されをやうあく
一編のやうみとあくふあ季

一此編古今の人を霄塊にて列年曆の次第を
うかとせととも文章の體裁分類をあくは
ミ諸辞ひくくふゆるねあうりゆゑあく
一彼度別小発句撰上本の折り敢て一體ある
やのふもあくもとせともば編も亦撰

やもへーみて例の書房う心ゆきひく
れてや月あ川の御き源きえもあみあく
きや強ぬ流きの一もうちおきくまをきくゆ
きのをきく僅可觀の海ふれ入られ波めせれ
く乃行とくまがもわんか

新編俳諧文集上

上凡例

目錄

駒墳集序

京
凜更

高館懷古

江戸
蓼太

桃李集序

京
燕村

丹布索比鳥序

カヒ
葛里

虎画讚

江戸
巢兆

新小薺序

江戸
成美

何岱集序

江戸
十時庵再勸進帖序

新編俳諧文集下

目錄

端津久李

京
月居

瓢藏銘

京
雪雄

大坊主傳

江戸
卓池

送友人西遊序

江戸
蟹守

蟋蟀辭

江戸
桐栖

毛蓼說

江戸
豪山

二十歌仙序

江戸
路宅

下凡例

三

炭說

17
椿堂

茶隱書画帖序

17
篤老

芙蓉扇賦

17
渾古

其夕女句帖序

17
玄蛙

豆太鼓頌

17
鳳郎

紀行

17
圭雨

名月辭

17
魯隱

書画帖跋

新編俳諧文集上

上凡例

目錄

姨捨山賦

17
樗良

二十歌仙序

スリ
暁臺

芭蕉翁真跡序

スリ
士朗

其唐松後序

カヒ
敲水

茶摺小木序

カヒ
乙二

十時庵再勸進帖序

江戸
道彦

無名鳥題言

カヒ
葛里

俳諧古今說

井里

雜文

泥中

秋月序詞

鶯笠

楨小庭記

寥松

雨中子詞

禾系

紀行

蟹守

夕顔頌

少翁

真貴

一飛

朝起論

護物

國見平記

對山

送鷹園主東遊序

鶯笠

小築記

寥松

自誠

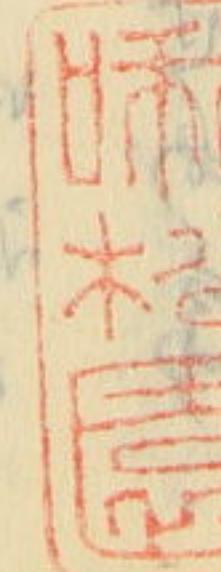
蟹守

折箏銘

寥松

新編俳諧文集上

華庵蟹守著



駒墳集序

闌更

物のかみをせぬの翁甲斐う根み林をりてしもさう
奥み水とけそめしよりまも日もまく月ふくら
つ行約のまぶたをあゆの間乃やどりことまく
旅の哀ぬく暫時百景の旁付ひ古くとよん
腸をくくさ山里のよれ後の宿よ鬼の皮むだ
つれし童子とも愿ひ残ひあるよ／＼風流さぬ
ある中平馬蹄るふのよ／＼とまくもさみ／＼もあく
されかのき孫を悍ふとくえ子載不汚の正風を

のよき遠近の好士の句々をすくひて駒墳集を
達んずるを考る三車主人の説きをぬくみて
老懶おじに眸を引きまつりをかに寄すらふの

姨捨山賦

樗良

更科の月ぬづき秋八月八日の秋爽於山小堂
従臺山を冠うまけのむづみふたびら荒磨川花やうに
簾をめぐり雲井のくちと名のくと水上の月とすく
洞毎のあむ音をひく山の松風ふあくへりくら宝ヶ池
桂ヶ池文科川をく流稻荷山八幡の里川中流と
むきむきうち居ふ見えかくは吹樹主神をせめま

ち／＼見るもの目め／＼ことをわざねあり粥をも／＼を齋を
娘／＼あ／＼／＼石上み／＼と／＼す／＼

高館懷古

蓼太

前後の戎衣一小あまほり平泉のまんまとをくぐれ
大竹小車の行方をゆくあはたたかのま／＼軒むりひ
ち／＼らぢま／＼いともとひ蟻のま／＼ふあくま／＼は
人も教わ／＼し／＼しうる／＼み／＼のち行うもあくにだけき
も／＼ふき金輪身あくま／＼たをやうある女房ハ銀簪を
かくに糸み／＼柳の内所をみくら小琴の音を
だやまに風うねは伊羅乃内所をも袖と切り之／＼

裳をかゝる四方の風色と以て、家の冥ハカウト
モニキヤクサウキの事と和氣或致り離情をつゝ
衣川ハナリとすてこそ波をうちあれと源の重之、
渡とそくくねり流こうもみさと月の山ハあうれ
湧白山を雲むわけゆのをわすよ國見山室根山たゞ
志称山を花の雲みそひえいあせのまゝハ時をばつ
せ鳴ありいとみの室を本立あらう今鷲山ハ曉を
報して時々の津みを和モる平仰うも毛誠寺
の堂塔四十余楹房五百余宇中等寺金色堂經
堂吉祥堂アシム神社佛閣山ノ日小暎一月小
川やくがんつくじとの柵を表立和泉三島の紫ふ
ノテ碧流岸をうちか上ハ小蘿でモ被ふぞうり
源廷尉平かづきにむ脛巻ノミ衆星也小辰を
遠さうかくちよ立かくふよつまひて秀衡一門の榮
耀更ふりへくもひは口をあすんもすめの風を裂
鱗をほする圓をようこむるから炎豆乃梅丸
鶴も九臯也ちやくみ子秋を楓巂ハ十翁の浦小
万代をこうきしもだ今まく

山そひえ川あづれうりあ葉の風

二十歌仙序

曉臺

黒道玄龍を画て鱗甲うこき忽烟竜起て雨を
くくじ 烟竜を生せし龍烟竜をもくへもくへ玄
何んそ龍を画ん誇も又其人をほそあまゆの二龍
奇をかへひく妙をふく事むとめあり其龍天子
のむうがを玄龍とソ桃青二十哥仙ハ画龍ふと
画龍ありのちま龍あり冬の日ゑ舞仙くられあり
世上今画龍を身むすべにほきのあめうま誇どり
えむ

桃李集序

華村

以のむかくみのまもん四時はすまむす仙翁もくせん
友多きのうぬまん人情もあらあらんといふまん人割て
曰世哥仙ありまやく年月を確くおそくとく流り
おくれさん手箋て曰俳諧の活達あるや寒ふ流り
否を流行却たゞハ一圓郭ふ添ふそんを返ふ
走るうと先まよの板て落れたまよのを追ふ
平似う流りの先後位を取てよしとあらのまよ
くふあれり胸懷をうつしめてよしとあらのまよ
あて翠巣ハ又あらむか徳儀あり題しもとをくま

上

四

もくもきへせりとよもじあへて禮被集
説大意を判

芭蕉翁真跡序

士朗

本向老人の家小芭蕉翁の記念より幕後不消で
ある。本年の月を侘たまひより稻刈行け。裏
おの壁はいさよふ菊の匂ひ小さもく海ああふ
誠人^ト庵阿孫庵坊を彷ひあてありと吹秋風
みどりのかみまへ侍りぬむ。重衡^ハ興侍の局よ
うれすふ國むらの聲をくひ切てこれを紀念す
内使^セよとそま^ト遊ハキ床ゆすきとくとも

もうあき草むらをとを活想せしめられ
筆の絵かくてかくみまふあくへまものとくわ
かくはくうみもあくこれも以^シく松葉の葉の
下す小葉のうるすの葉束たまきとそやうて様本
あくつけてよ^ク不汚と稱へはあ^ト老人の深契^スを
らへすとむとも定^シむかの造物者の無を

丹都^{アビ}鳥序

葛里

それ仰御きくうの急ありたゞへ月暮のとく年
候うひやもく境のうけのよくねとうもくめし
それ中止不易^シと流り玉をあくもくともとく
らへすとむとも定^シむかの造物者の無を

在あれもまことにかくて因る事無く感する
すわれはあはれふくも天骨あくもとむ氣が
多ふ波知るやさありまし案されに尾張の士郎へ
那翁の高小首は甯をもて流れの急を
わらうこれの暮残を財ものより材あそびき
て不易の心を波生せりとて甚氣をもあひ
ある急をもくめとく幸を近にんじあれ
繁のめぐれたつるゝ蟻もれわざれあり風情を
おのうううらぬよ／ややくかねりやくやく色
乃喜とあ／＼ともあゆの脚踏の色せらのま
ま／＼ん／＼とよづねの底あさう／＼あ／＼ん／＼と

承启あて暦年年と縁よみ

其唐松集後序

鼓水

人名有利の名下ほうちゆわう／＼ふ鶴
勢と勢と老の後とあ／＼あ／＼ぬぢひもとを
遠と庵のや／＼うま／＼唐松集の説されの名を
あるふも／＼又利と貪るも／＼波中と能満も
よへきあやさとお／＼ぬ／＼の口とみをもさう
らねつも／＼せた年とあとせんあさあに唐松
の下涼／＼志とめぬ／＼あ／＼とせ堂の
あ／＼ふ管と漏る／＼のあ／＼

虎畫讚

重厚

虎ハ五百歳の齡ありて山獸の長なりまくやゑかりも
武士の筆先をおきぬる事無く其掌大ふむかし
されとたゞく狗子を喰ふとまことに忽碎くあれ
をもて狗子は盧の源より以ひめを彼の野に
馬碎ありあわす所仰され必しも竹もく
てくみ落て強ふ地獄の底に賣つてされ赤
鬼の懷真マツシマツシりゆすと嘆

茶摺小木集序

乙二

そもそも夏夜ナニヤ——さゆのむわし 东风我晴窗
夢哉て吹落せ江湖白鳥のをとづくし碎仙も
天曆の帝の滋壯内侍タケシよき人やタケシ人とほ
名句も枯葉カクイをうけゆる翁のむすれも歎氣死んタクイ
人ヒトが池塘喜草カニシふ惠連エリントと思ひ出せ——名詩も
呂翁ルウ囊中カサウの枕カスとうりて茗梁メイリヤウを枕カスふ榮達ヨウタツを見
一イチも枳里紀王十夢シラキのうちシラキ思ミム陳ミムを鼓タム不撫ハフふも
させ残業シラセのあけほの國鶴壁クレハシの裏シラも夏布カバとあつゝ
まゆのまゆマユマユ——夏子坡カマツコ根枝カヌチ小漸コジンの浮橋フブをうけ

そぞらよよひありきて 岡の堂佛幻庵の古き物を
彷彿するゝ傍を几案憑きて嗒焉とおもひぬ
妻子やをもうそりとて 伽縷の一丸を口ふまふ
曰けりハ極みゆくも茶す小本公と経事極より
うちぬそもそも句を函詠雅致新奇をあめりより茶
もう小本をよしとゆく工案のたまけとせよゆき
かき消へうせぬ後も又片のねわそれ江淹の彩色を
ゆきかの文藻またさうんきうゆく草の生むる
筵す織とあく盧仝、七碗腋下不沾風を
生く 晓臺の巻ゆきの茶一盃の波生涯誰の心
うきえりてさうん壁集やあふく海の川浪月くあれ
たまてせを照り夏すうあけつきんまつあは山乃
豈あらむよもやれやも

新小筵序

巢兆

かのふ原のあゆく居てもの喰ふあひりへ
まもひりひあくやみのちばゆもあくにあき
くもゆく泥ふかくもゆくを修あくもりゆくと人の
をへだへどくものく教ふ業え修へしきの
をへどくも修まつてやみわん川のたまふとて
坂東ちかくとやまの修業何のあくもおもむのあく
らやくやまの修業の年あくちかく園えもくろと

りあへて残つてゐる當地の面積不備に付りやんと
京都旅宿乃付物申候。傳より云ひも申候
あのを御子あらまの役をつるも讀小蓮譜
小蓮以やうくあつての相合まあとを教ふる
竹りしよ度三うひにいを教承れあらまきも
うちもお風り書ん被空舟ふ敵を相手と以て
八重敷ふおとひもを竹くんよりも淨名居す
す文不被たゞ一耳ととてうひの蓬も新き
むしろとかと付はれとありともわざもわれ捕のを
柳のぬきそめぞうをりぬあもこみちまきも
何んもしろもあつけ竹りあんほ良冠者うそき

たゞくま系撰者を節化念かくやうに思ひとひ
根木の因縁手やうせせせまくの巣泥渾含

十時庵再建勸進帖序

道彦

羽根くづきふととくもゆきふ多の栖家をかへ
ひとはふ理の舊説をあくへして改るものをもの
かゝるや猿の傳説ハホトよりあるものかはア而皆
其性わるものゝゆの列であつて一言もやがてうり
そめ入一山の堅てつてしとくへあらひをみぬと
幻住老人の名をたのむたれまくもうあるや
そかのとれ天狗まくね樓とうゆふ室めで小梅の

十時房一時半回縁セ一よりむかへくわへ
あは義法のくふ集めりとも詫駄れ詫あ
まふおよもあひちり安々登蓮の裏むら
たまうきてあひあん國炉裏もあひきあれを鳥乃
埋め一票のえきてのきだらまちふきえてゆるとちま
らぬ懷強くのむのまきをまくとくの多きものを
けれあひまひみに蜀士もむきを未申ふて日うけ
よき三笠町下二度のくき庵とてあもりふ
みうちりぬまそばの有方百七十坪家総のく
一門半に柳うすや柳ひと本半の多きとばもふ
見ねむ
蓋源川左邊の葦の最妙山は高堂と

けの平各竹萱板縄等抜うつて例ふあひ
夷進ひも一條をやると爾云

何岱集序

成美

今庵小室の筆わづまそれう名にはあくろ
とゆてもくじり筆ともあひあくろあくふやとゆ
一ふ、サトヒサウ山案は伊賀の國みあそひし
國姫の友れの中よりゆてさき御宿の懷身せよかし
坐まうれどくもてあしあくろふ季とをまも
春常とも匂袋とも以よへきをお思せかくとて何
儀とよふ半を六条河あれ後を仰氣の後と

書るおもしきをあても底めの文字を立ちひあう
例のふまみみ落する焼曲あるへーあれす
くわきの作者のこゝもとづみ入まへれ、清潤
能手のとうこみぬくろも巻をりきのくらふくろ
だ、この中ふおかひこうくうり、やうモじいもあわ
きくものれと囊を括くすとくめあーとうや
きくおまねまともせまくまくはしをあまくと
度をつくみ候る

無名鳥集題言

葛里

春の日のあらあらのるをこまく秋の日のまばれあ
にやる其美景、みむくと年代もわざまわーう
ううふあつゝ天柱あつてくらむくとたのと
自達すうれおひのひとのあり不く山あくめくれ
ものうわーしをれけーきをのきくまひすて人
のあらもてひひそほへきものふま秋をえなう
夏の日ち照りもくくあもあらあひのゆあはるみも
只竹山をうれせのゆが困苦ともよきれ脇た
くさ木もあくとあん那くまみ事ふとさあくひの
かくりあり東坡居士乃おおそれを五十とせ
以きて百年の樂みわづしてきのーされ事る

とそやして柏の木あんとあるきかくとて居の
うちふ思ふともすこひくまもあくねひたん
ち實ふるの弦もゆくもくふあん是あひひな
三つあり鶴の足もく鶴のあく縦一よしや
うの名形一人の心へは名形しきふあくと
只そひの無何有のまみせふよ

新編俳諧文集下

燕庵蟹守著

早園

月居

端つづり

獨酌つづりを破却する客あり柏をあくまがて
いとも拂えさんと宿てあり乍今まのうちみ
拂新あるはんとまくらかく居るくとおもむく
たまむくのくじもあれ家をあの羅浮山に何ん
とはほひあくまくまくまくまくのくじと
たのきとすゑくら入るやーの揃ふれや
峰ふるま柄ね木のるもくわんの木

炭 説

椿堂

崇徳院の時錦帳の下草紙庵を従ひて
毛ひつのええ號又毛坂の間へ誠あん續松乃
もええう一よても高き即妙石すすりへ云ふ所
あり亞とあらとて櫻とよ叶をそびて誰と報ひ
さんみふ其用と達に歎炭ハ草すくれ形よよ
やあのう一炭のをねとよもゆ法師と體せ
日みも思へきすもこうし

瓢藏銘

雪雄

ひよかく時も邊にやうさんくみうる魚は幸ひく
やうせて身のまき及故乃端年行くと書つけ
そ此窓のあくべ爐の下ふ引ちしてそ中
寐も起もさぬ仰詠うるむのをあくべ
酒掃の臺僕約ふゆの外不見ぞつまやけとも耳ふ
たふかけも遇一ひらとも失ふとあれを金玉をも
う一ちくはゆくゆくと罰新武人うきの罪罷詮ま
す小室ひて斯小瓢藏てふわと壁石つかけ
つゝ是不納多て臺僕う煩我をすくまむ而す
ふえて一云をひつやとまくよて終へ

汝に大ふと泄へ易く骨軽くして覆也

やまくはも筆へり／＼若き歲暮／＼自鼻
を書いて乞児に與へむ

三原茶隱書画帖序

篤老

昔わは大納言の年うせをひ前の大納言とよまれ
を珍ひて後京の行かざるを往還端午
役者をたゞ茶を接待せしめあひてさは／＼の
淳世もあ／＼を家せ珍ひよそのほりのゆゑ
さみとぞとせ珍ひよ／＼何や／＼乃事之代乎
又とぞとせ珍ひよ／＼何や／＼乃事之代乎
又とぞとせ珍ひよ／＼何や／＼乃事之代乎
とも表題ども失念／＼され大納言の内家名ども
範身のゆけりあれども／＼あ／＼も引くり
主と云茶隱此一卷と／＼と／＼や／＼大納言
ゆゑ茶隱者と／＼役者もととと茶一もれも
接待はとぞと／＼人を待人が人画かとね書粗ち
而他端所と撰ひてそひまの一巻つとて定ひて
隱居の後茶の爲ふせんとすかれとひがうちれを
町人もと／＼今と月ふきうけんのお處／＼
風流の志とととととととととととととととととと
篤老小器れを乞勿漏辞退せぬをととととととと
昭文政三年卯月號老園の小庭の苔

老の事をさすとぞとて

犬坊主傳

卓池

太坊主とつらひの人のうきみ成れ集の男と云
すとあはば彼の竹林の徒ふらわゆを復も
黄浦のあふはりをひじまく佛頂山のあはるの
象耳大を抱く即ち人呼と太坊主をりよ
りかふ人の哀うそおしく夜あとをはまて
わらわらとまきだねとよしに食ねとも後され
まへりかよととをきあむとくに市中ふあらむ

小路（引藝を捨ひ肩ひ夕へに嘯き花乃
わさき山みねひ飄くとくめむ死ひ人をあら日
弓場の様のすくみ人立がくとこく向ひすむれ
ともえくみゆくをくまくまのくちわらと
あらやうるせん月あよ對して無常迅速のちう
あきを思ひとよやあくぶをくぬまくは庵も
むきとぞとぞとぞとけいはまむへまくあ
やうて都率の雪のよすすれ草人あとおひ
やあ修りれり徳川つらふあくんも辛亥
あくの後あひまもたれとそ其あ
きをうれ付まゆすとこを

芙蓉扇賦

瀟古

予う別荘を竹樓と号して常ふ蓮と並び
其檻の外へ門扇の簾ふぢへも富士の日小
く見えてやうやくもの景致に癒しむふねあ
琵琶湖の八景もそよぎ省るはくと以て
主人の性をうふるやと勝ふけりもとうろつま
けりやと被委ふ引てえもに幾年もぬりし
こくふああれハせんきもあく思ひよるまくい枯
芦を寄て床を仰り壁紙に白ちて窓とか
須磨の伏姫の右底の板ふ芙蓉扇をかねて

見れハ佩惜めとよきみじくし處とぞ朱葉赤
叶半休小筆と圓、松柏の如く視くとて更少
人情の害をもたらし残る筈ふ筈ふ健き樹の如くと
うかに桃山ことくすすむ思ふよもすすむと彼の
破戸をむけ、滄浪瀬くとて桃山うち
つありてときわらと遠きあま負るわれハ抱る
をあもそくうへふら因あくぬゆのきぬわられて
かえ乃窓よぬくうかく沖のあらうみを向
みの新と云くとてとくはふゑんふ洲御のと
うひをあくむ名ふ員よす山岸名す梅の弦
を虎岡のありある出猪の鼻のを源ハ尾

志を風のああひふ似て見るのみの控帆ハ小
塙のたゞあゆひく波さみ千出で約もま
譽小舟と陀筆航游の意不深み旅人のりづ
亨前小今切の放帆を見送り宇布見山経の
回室小よりは撃けふまめ風を以ふるもぬ
かくに靡く風情ありてわざれあり伊佐地さ
ちぬのへじくもくわねの波年廢て
屈曲あづく画すわく 村桝村の湖磯
細江女テ浦小模まくと佐列ノ 箕倉小おひ
く嘗あくさぬもせきをり 早翠の白根を
信濃路の山くをふみて至るく 冬桝小
さむる厚金ハ伊豆ふ佐鹿の琴かくふ画ひ時を
以く村鳥ハ涼名の橋の傍をうつし 義政
かやく入日か新も月みくらき源ふむもむき
篇撫譽うもくの已もくもくたふも只
ふ窓をかくちくやくふくえそ其氣を漫然
とくて英人の宗教精ふやく百景百興を
すありれハ撫譽もく名ふくたのくも彼ふ
見は亭ふ蓋り居て萼をちゆのひふせきと通き
花とくすみ教つふやくせて壁の崩れん心がむき
残ふやくむだすよみ

送友人西遊序

蟹守

宿志小ちふて三月七日八日とも箱根越え旅客の
うろをへあむと友人何事も駿河路や宇津乃
山えりと伊勢の吉神本宿て大和めくり
もとて知立を志のやうと見え送りぬ
そもそも能国法師もむろまわ猪平白門の
譽と殊く彼上人ハ西小ちふ故實て
ふを見ほけれ名を傳ふ今子と仰説不
なされせを瓢簾のこうくふねせ行く奇
境凍迹を探んぞ思ひやくして羨くし謂

少文う山水の癖司馬氏う壯遊ももととく
あくしとよもゆきや大井川ハ歩きと
ゆきと人の滑小負れを被るこそ芥川
あくとをうまれ鞠子の宿行とくけい
せすゆえ多かぬわくと翁の奇骨もあら
つゝ沈吟せられがふあれと風教あるある
べしこれハ貴重の草木より其の花根園豆
腐ハ豆腐能味ひよく御食かくと來よせ
かくもゆきをもとく

其タ女句帖序

玄桂

すくえもそじとよみても以てちめうとて
久方れあゆの橋をおりてすら啼る妻の果
までもあみやぢんと思ふも見えハ雲を出
雲か神垣へむ詔さざる其タガ女らのあざれ
きも以て軍裝／＼それへ象西風の道を踏
習んと魚ふめを娘を憂ふと思ふ風うに
風流の景とひゆ／＼姫蘿をめぐるはあ東
あまと思ふへ／＼せせらぎの酒肴とん泊屋
主乃以てすくへき神をくと思ふへ／＼御湯の

而句とぞうえし数句を無理不似人と思ふ
くらくゆふうれての自然小便をこし己が上手と
思ふへ／＼又アモトもゆふま／＼たゞ
所道の先生をまじて松をあつり徳あるだけも
あひ又馬ふ含ふま／＼様のよも向ひて畫
絵じうもの二見深き紫ね玉の數／＼を乞ひ情で
詔あおぎりしおもか／＼たゞんや
それ左側の水磨をゆきの甲斐ある／＼ああ
瑞みをういをくわくわゆふかのうきを
書くあふ

轉 辭

桐栖

妹の面おもてはふみても寂しきもよし鼓ひむ
おまきもそれもちんといた虫の遠出うる舞の
あくまく舞みやく以へとも音くもぞいの
馬まき尉とゆかを向とも以へてもせとほぢよ
くと鷹おもむりをうくわかれとす罪を
詮るものあらん

豆太鼓頌

寥松

喜代日新のうきと菴小袖の御装束の

毛てわきふをうけするをのせんはふかくらひ
曲事くらひはものめ似て柄も裏とあく表と
あくほ帝をうそ墨小花形をおくと飾とす
豆小絲つぶさるを緋ふつけ振うとせそ擊て
聲をあきまへ僅ふ春か發生の声と象るや
之ともうれいひと竹の淫靡あるふきくらひ
のやもあくは是かく人の所謂鼙鼓のたうひ
あくへりれと廉小あくまほはまくわやまくぬま
が修をうつとけほつく李めくと誠ふをまくわきと
慰るおうとまくのとをえむりき鳴くとす
九序の習もつひと師曠う耳をかるふも

わらひ只与二郎多糸を糸席を下拍子よく食を
島の干氣う扇ぐるよりもひとあすくうしやく
をもくもくと五つの中あいの豆のふかきふ豆を
ふんまく下平あらすの豆味あくをわれを煎たるま
さへ花さくまの豆とさけは是も亦揃てほらに
やとこもととまとひあくはく量り塔の實の事す
口そく廢るこくあくと多く量り塔の實の事す
盡る日あらんとあらんとあらんとあらんと
あらんとあらんとあらんとあらんとあらんと

息杖辨

豪山

元天壇の写ふ勞一にて功あきさかのハラキ息杖と
中やも様杖と四枚六枚肩伊達看板小崇帽へ
又はきとも壁支醫の雇きとありてハ永倉のヒ
ヒ者とわらひ柱門の様系みと浮雲の面せ思
ひもひとく汝う質ハ竹みと直くあるをわくられ
とも多くハ序畠敷垣より推出さき不幸も雪下ふ
寝ざままで其つともや且みをあまと拂めてかぶせ
穿ちタヌミ亭大を折てちうと臂をかく
又智知むち錢小元の道み度りあらわまうに接

おまかれておまかれて其事へ渡す處もおまかれましたまう
雲の峰を越へ一處は閑閑の川をこよひて辛苦
はまんうとふ一それと嚴多立場酒の肴もあつ
つゝも炎夏の喰候汎も核小汚もちのま此
強の様くまむる化玉小出女の立ひき投賽筋傷
負歟ハか一あくまもくもわんや果ハリ合喧
嘵のはくあく稻妻の勘一て大業物のよきや
五とも先汝よりかあくらう捨らる併え来因うろそ
無心あうりれ其活りばかりと是等用の用あれ
きく一吾ニシセ波の行路難を承撫のよきや
だよも殊尔足小懶わく従來三百余里を海小
二百万歩お傍をうくされ、日毎平杠夫の難疾、嘔
益病一とどとも汝久勤幹をかゝせ持かくとくに
徳をみて感をうめゆる御子實小辨を仰ていさく汝
小砂^{アシ}よ彼柱枝子内一則平無門和尚所言をとりて
技過斷橋水伴帰無月村とわくしハ汝う有掌不
しき是小脇入せと負屬榮枯ハ一拵ふづりと
知モ只其自然小姓のんをあうまへ一

紀行

鳳郎

初裏の山を津ううかるめてとおふうかき新の
書の寂莫のふわうねみ経とあへてお人のまん

みてそれと風月の境界より凡庸の小手洗の沙
治ありわれへ昔今は是非を以てへきにもあり承
とやうれつておは水幸かうむを都國小奥
の邑くくをめくらしをまうるやう依む手
入て一枚のやうもせまくめりふらうとおは
しき年のやう六十枚うち四五枚は届きま
おほゆ段どんと本漆塗の糊こもぢあよに紋布の
ねさなうのあ指とわをせたんわとあふ因金
ゆほしを差何くれとあるくく立まをもと調度不
ふと屋もテぬあり其質朴たる古風のあこぢうる
すすりへいのうある長の黒ふ毛ゆせんじぬりあ

志のせうあるもすちひひやれて干鱗の日南よしにも若
美つゝせし山海の味みことかぬ恩ひをかう型
くくづらつて三年味悟のあはかきだやうく
めし喰ひ仕事ひらひ濁湯ひとつきあくめり
ゆそひうみもち代りけり大なる盞をとどき出
ひをれこくやくへづけをとくもものあれ
う手とくつこうふテぬ以と無ゆかあせりおほえの

毛簾說

路宅

青帝一種をひしてすう庭ふ生せしむるもあ
所謂毛簾あり識者曰是一名馬簾ありや又

或人ヨリは蓼ハ大蓼ハの名シテ毛蓼ハアブテコブラとも
蓼シテと行ハシメを是トク行ハシメれを非トせんや手ハを
褒ハシメ貶ハシメみかカシメ是トク形ハシメ中ハシメの一塊シテみ白根ハシメをあう
して自シテ一往ハシメの馬蓼ハシメとある又是トク氣ハシメあハシメんや非トせん
やトク氣ハシメふ今ハシメ年ハシメのハシメ人ハシメ六月ハシメを小國ハシメとハシメとある
がトク氣ハシメ博士ハシメハ八月ハシメをもて是トク用ハシメ也ハシメ亦ハシメつう
きハシメを是トク行ハシメきト能ハシメとせハシメもや拂ハシメをして非トふ
へきハシメふハシメ非ト是トク方ハシメの洗ハシメありとせハシメハハシメよ
是トク非トの間ハシメ小根ハシメひて再ハシメひそ肩ハシメのたすハシメ小もハシメうひ清
光ハシメ小肺ハシメ肝ハシメを曝ハシメしする蓼ハシメの種ハシメを附ハシメて至ハシメ不是ハシメ能
をハシメて之ハシメ獨馬蓼ハシメ平ハシメめハシメあハシメをもりて馬蓼ハシメ平ハシメ
めハシメを候ハシメふハシメ

名月辭

圭雨

人ハシメううむハシメきトきトきト上弦ハシメと月ハシメの名シテのハシメ歌
う名シテ行ハシメふハシメて肩ハシメのハシメ手ハシメ中ハシメ月ハシメのハシメ人
かハシメうる曠野ハシメ沙村ハシメ或ハシメ川ハシメ溪林ハシメ海濱ハシメふハシメ、
ううう逢ハシメひハシメ一秋ハシメ、ハシメかハシメひハシメれ無ハシメを死ハシメる夏ハシメ
たハシメも足ハシメまかハシメき因ハシメのふハシメくあハシメらう希ハシメくあハシメる
景ハシメ候ハシメよみハシメおほみちのハシメ山ハシメのハシメ日ハシメも宿ハシメる
うもふハシメふハシメか經思ハシメいせハシメれてはもあくちり
ううう音ハシメを人ハシメとハシメともに文會ハシメてふハシメり

名月の辞と云ふと題して極ふれのんことあるもの
あるるもうちめり出んからうるまき月が思ひを
みくさき葉小かきともも桂をすまゆ笑ひも
うるる詠因形のとく先からうりしとてやみね

二十歌仙序

未記

人多き國を市中花厭お地おちをもよむひとと思ひ
老ておき高林勝地こうりんにからまんすを詠かへる
道の雪ゆきいふんをうるし苏島の情じやうをあくまん
うるるとすまへし奇測きそくおうへしよとたづき

うるひと以いみをわわされともももくとうりまあるの
ふを感うして市中いちちゆうの交こうをうけ二にとせもくうう先
羅波津らばつ乃のあたるあん波あんぱめの里さとのあす萱かやあまく
えのそつくりて大恩だいおん度どとうひそくお強たけととももと
ものうくうくハはうき人の愛惜あいせきあり夢ゆめあううて
ひちひ常じょうみ老ろうのななを歎なげし強たけのなるひまく
うかんうかんうのうねうもくあくあく門人もんじ誰だれもく
あくうううも齡うをうるい曩むかし小盆合こぼんあとゆ一集
あれあれうううひの二十歌仙かせんを其第だい二編へんとくを
その朋友とも門人もんじ兩吟りょうぎんをうつめうつめて題号だいごうハ
延寶えんぽうの例たとるあふたうもくわうもくふ自じふ

を書ふるをかくみ假よりと達するとなむ
其達するといふをばもくをわすりれ連句の
速きもかてもかくへくふをさりりハ文のかよ
ひみと假ひしもあればと假讀の二圖ハ巖多が
波濤をうきをあじふわらひり更も一覺悟の
とゆふ經由よからせを批文こそを門ふあま
雅かれうをつのまふあみやまくぬまを
あまのまうを變うこううのせらかうがくの
却くともおもへき

書画帖跋

魯隱

丈かくとひよとを記すのをかくとひよから
を写すのをかくとひよから
も入るや一句一連乃くちをまみも又はこども
みひくかくと一春秋のゆへりとあわせれ
山の済みがれ流のこゑやうあるものもあせまの
をくときまくひを見ゆくひくとひく様の
つふもえへき鷺ふ事くみま繁をねみて心の神
の教をとむとむ風韻のたうをいわへとけち
を見ゆやうて其人かくをとへかくちう

西へしきはほくに筆を落とすとさへや
至べきとはちとらえやさわく

俳諧古今説

井里

夫俳諧を初めの流れて其先達があり人皇
十二代景行天皇の御宇日本武尊東夷征伐志
を甲斐の酒おふして新治筑波を出て以て秋
寐つるよ御路へるに即ち此翁がふへて歌
ふをよみ秋日ふと十日をとみくへり
尾連弓乃監觴すやそれとこそを緒音あへてす

の文字も定よりて萬葉小倅保川のふをせざ
入き持つて墨と尼のよもふ小莉るよ縞紋ハ
獨りうれと家持の下の匂縞すよ上下全く
是そ連弓の始あるべき又貫之の三十一文字の一
首をよの匂とひの匂とひもすみよを後
村上天皇御製すの匂ふ縞壁因侍の匂をつけ
らまたりあらむ平の清澄公アホ匂小登蓮法師
上の匂を縞すがひわすわとけりかとくに
かくてすうむりことがもとまことねとあひりす
うち不謂粗疎がこそ今の俳諧みて松
永貞徳もくも宗直をゆるされ殊ふと

やくにすらくをめりき侍るものとありぬが
まことに年あきて松尾桃青ハ小村季之の門下
入て自西風をかくし中興一流の祖となりふれ
きの二千余人の門徒ありて夷洛江ノ小川のよ
多き處す一株の芭蕉あると号て人あつる
芭蕉の翁と呼ぶ小なりぬまうさはくへ変
化をとつともとすり變へば翁の流をもひて俳
諧をこそせんむれあみ俳諧とゆふ三つある
べし月風流と風雅の辭ありをくしきを
俳諧の名よりて拂まう風雅乃實あり此
三つのゆゑにそれハ世俗のたまうとへと支

考ひひきもむへきりあ俳諧を云うりかうは
かのこの思ひをうきをうひ枕を梁あとをう
まうひをかみあくて俳諧の名あしたゞひ
渦利ハ赤味管より出ふかのうりめと渦利の
計アミをそくへきふかしれともあふう
お手あれてつまうを考査のか多く火燒。味管
流りとまがあらゆる許から専専十園子も小
粒みありぬ新の匂うづらをうむかく味じて俗中
の俗をもあれどその身落まくやうさはくへ

新一以ひあつては御室の幸と云ふがあつ
あつては御室を古今時代の事があつて
あるからをよく年と被造化してうひ変化
うそあつけをかうとあつれやくわいひ
あつみあつてみづき等してかにせる櫻と
あつふさん

雜文

泥中

もく一糸ぬきと橋を鬼の行ともあもく
空室を空あめて元とあらぬ行つわくと
手履の底を踏れやくと押さむとて身を
やあてまわれと踏みこむ鬼とくとくと
よやくとも何んの益うわん今と彌縫
をゆふ人等かれもこれもおくれうりや罵りあま
かの奇縫を好一より孫吉あやせかく
りゆくふこそ

秋月序

鳴笛

門守お義守とまおちと子をめぐり行ふゆるに
きのまくとまくつそれと火嵐の皮ハもじ

とく多くもゆればけの跡を抹喬^{タカヒコ}とまつる
かくあり熱田の社のすみかにあり笄^{スミ}せ
とてゆきをほきとも尚やまくに翁^{シロ}とて何せ
とくせもと同ふりれちまふ言へる

蓬莱みち庵とあるを秋の日

楨小庭記

寥松

さうのやしやと雲をあくよはせふかくもぐる
あま庭のうちめにとらひまた枯^{ハリ}すを四すを
人の根うずれへ其やくへどしてその心も
とめにそゑけるとして、う日あくにかゝれ月の
やうれそあわうくと垣^{ハシマ}の葉落とづる年
むへも枯^{ハリ}のあれやすくもすくよみづん首の人
おこうさくらふをもあひわうてひときを焼く
ともきのーきのと毛庵^{モア}てうつまつてつらそし
ともはまきわら裏もやあくとまみとまえの
みくらはくう年あらきゆくらのふくらせく
ぬくとく家^{ヤマ}のまくまよくもすくーー
やーであわき風あふ吹きれがくちまの
き柳あくねあくねへちくもみひとうとあのまき

きかくまきらしも人きのめ魚あらふこそせも
つまうりも核の小舟といそやうものよこまうぬ
やまねすりからりと居る友人ほうとお
いへらく核の字西うるはといふもせみを
ふづり核とく書もちらるあん源の船屋
かくみはとくと被へ核のきくひと和名し
みへあられりあらわきを核をくわくわく
けあるさくまく核のつやうふあひ立
ゆゑに似つてもやく核うち不らぬまく
核のわきみやまんあくしつれきとくめ
あくひそ小舟を茎のあうのとあひてあく茎
さくかみのあみかまくうふあきゆうは

一

雨中の詞

未紫

あくへ秋ふまくとも晴るあきゆ形うき
考のあくあくさむ月は影もあく骨ハ群
日れきりもええきとやうのうりみそ
あくまきるやうふあくえまく只前載の小舟
あくまき思ひやくれいへく魚のあ
あく那まで像ふ取まくとく常ふあく

ぬくもあれあはうあとあむひへま
もあきつれくふありりゆふされを何と
あく秋か老るあらざれそひ
あくぬ奈ようちつれ家を何ふせん身乃
あくふおもんのぬふるくつるへきと
おー人をあきよそてもの下ふきよひを
れへ人のきあへりのれうあめうすみま
さひふ含み鑿とりそ香爐ひのあきけこま
まのうそいとまれそされとおりやくま
へき親まちとやさみられハあくまくま
あかくろめあくもあむひあくひま

うんうきへのあぬもうふく
かく獨去ハいよせれとぞれもあくあく
おーもまくほもくふゑくまくまくま
あれてまくわく

紀行

蟹守

文月のうめやく耳聾ひ風もあつれも
うりあく暑き日小旅ともえを登孫志とて
あはたく枝窓つゝ咽の歎き邊宿等
を有ふるぢてり小狂お^ト翁の漫ふる

敦盛の古墓を候ふた程とあく神のあ拂ひ
やく候えあらび次テのとぞりとちて あちよ
よりは二の谷二の谷とるやかとくまくあらも
夕日のあらまき山下からきて書をやとう
宣めんとてのうまき事寺とゆゑにまほ母
おやうて其宮の今累ーあと人の告げにそ
むかへき席とぞりとせんまへあし
けふとおふ草よまのゆ併ふとく育の宿を引
まつんとやうてつまに火とすの傍見とくえ
旅人を仰ふの人そお義りあふと先やすり見て
まくとくまつよあらまへやうつまくみゆらふ

おとづれふ魚とてまよやうい門前み小
あわき見ふあらとれまくわらの傍見
ああいがりとひもく子細あまく すれふか
足ぬとくと教へ事もと力みて杖突あじ
まくわくに灯の新柳下うくて島のゆふや
しもだてあくまきは妻戸よりさ がくさ
まつうにゆのひまきは 稲と年めねむそち
もうりは親父あそぶたる故ありゆらよ行
燈のとよ教き あかの火とすりお教し
もうもつみえりひ入れられはお愁歌をまく
わんまく日も船のくのえらねしも今も

の亡者の事ふありと病のうちあざれうとあ
あはわゆふふ其まくらう人ふも病まふせし
そよそよひおののものも傍わらず苦シも
ああくへといふ娘メイドさ距スルあ妻も子も山へ
すりを音ノリをうけ淋シカクふるいめミせ
ほのうあり竈ヒロ薪ヒえの何ナニとわくシ
駒スカルくくくくくくくくくくくくくくく
山風吹ヒラフアモズれ吹ヒラフアモズれ吹ヒラフ
をうりふくくくや生ハタハタるん地チそちチほけハタハタ
風ヒラフもきずヒラフ浦ウラフあどアドアドアドアドアド
まきうへをやうて波ヒラフをつり床シマのへて波ヒラフのねヌを
さうし小波ヒラフをゆかんシマ一枝ヒラフとやうはみ床
とうてえきの称シマぬかのれも這ハシへて例シマうもうよい
せシマの波ヒラフはひシマいた聲シマこゑとある
是シマとあくあきうみくくく波ヒラフ底シマの纏シマ幕シマおもと
さうううれとくくくよもあシマねシマくくくく
とううう身シマも半シマうへとくうひシマてあくシマく
あもわシマくシマう今シマそ名シマのシマうシマ被シマ波シマ底シマよ
思シマひあくシマくシマあくシマしあシマくシマも目シマをわシマも
せシマ波シマ浪シマ立シマへて波シマうシマ也シマもむくシマ
美シマくシマ浦シマの煙シマと消シマ人シマをかくシマくシマも
獨シマふシマとあくシマ一シマ歌シマをか歌シマ年シマのシマ

新とのみ次第の衣をあ夙えり
以川くとれと寔え乃事
どあとく小潮物のとき写因のあくまかくられ時
せきりくらる

夕顔頌

少翁

そも柄をまく先あらて雪ふらうともひしれ
喉かくより花の足をもりあくまくし鈎魚をまく
手をれとりはるわくの旦あくそ唐を勅しめれ
室ふ夕鳥宿ゆへを待て喉かくひととく
あくねをすものあくんうしつく其わくゑを
見うに伎をの書巻道あくまく蔓の泥延ひのや
とまふらうせよこくあくの情あけよと
よくまひくの竹附みや又夕鳥のよの新ひ陰
かくほやくさあくとあくも紛うともく
されこそと云うのゆ法めくあくみ以く
花街柳陌ふ生る通行女兒ふむくかくへし
実を落ひてそ形あ未きくてふくらうあるくは
殺素師の薫る森の爲ふ仰くは御代ヨサツラ
天の吉葛ヨサツラと喝て水を汲み内を防き渴を凌の
筈ありしよやさくを許田つたるに傍瓢の名を

あせへはらと門遠きくしさんと人の手手ぬ
トモ竿ふかれも香具山ふ干草んあめの衣と
ええ風ふかれで天津をとめら領中據うどや
しけ是を鼎不熟すきへ味ひ耳く聴く人の脣
胃をとくは其功あほひありといひにへとされハ
是の聲あまと實乃ふ未あるや取扱得失の聲ら
ちりうちかくこそ

蟬 説

一 飛

ほみ教種なり其からいとちのそとて母乳の
色ち四五月には鳴わり豆波のくろ色かへて赤、
ちみりみて延乃めく九十月ふるり多淒ゑふ聲を
かく鳴もあり色の赤きわり薄赤さむとれて
六七月最さむあり又一粒二月中小鳴あり蟻姑と
少馬鳴より後候等年四十すて十七八粒於其
數の名挙てかく日くしつく
法師が名を聲のせとうちやそくをきて而を
少と少ふ小兒も取て是ハ亞ふうとをしとも
以をて持てこそうてこれ有み松竹のあの写れ
逍遙一寿を春秋とあひてあり短とせん

身ハ才余ふをもて大を羨む自終の玉樂と呼
かのあり菓を以てある米穀を盜み食ふるを
ひあく安然として風を吸ひ酒を飲て梢のままで
飛ひ空身を清潔不してかの古塵ふすひき
周あうの利のみ小かうひ端娘もあすけ人を
笑ふふ仰りされば空を陸雲も又徳をわけられ
を賦し美紫みをうけさんを詠れも人の年
だけ耳うへりありて嘯りおとせうをほやかにう
侍うを唐衣つきくへりかく沈氏齊王のうて
あふ英人の聲をますとくへ詠く日蓮上人の
御書ふわけ詠ふを以てある周羅をともかねう若

生を齊王のうちた王を怨みて化粧体もまの
ありゆきされが怨るの冥犯のうれかうたを上人
やうて流傳あまきんじくい様とめげか
ふと以て彼乃鬼倩いまとれまくわのう歌を
只色も音もうつくしき虫まくを走らるものあり

朝起論

真貫

鈴ざくに薺苔カンラン乃ワラシム紹カミ一繁カクふを
わらうひつハナヅキやうく日も暮やうてそーかの隣ち
教多の景ももくカニとおあひまくし名残

あく廣うをはくもけまひわくとも希見
うみも又もくぬめやさわるんあきよ花の
里とくも学えうき実蓮さんすとふし
も風同うめとく起物く平うそくめや福
うちまほ平使例小生て曰汝考平釣猿
をゆくたまく釣起くと家ふ來りく得
たモ教あくせよ以ひちくの釣猿釣記
の諸條ある平集くあくん西日よそ釣猿
ハ人こううのねくにや釣猿もさくつれと
よきれあくと釣るもやくかの人登寝
て源責せられくとひふ黒引とゆともく

ハ魚乃罪のうれかくかんじはのくまん起とひふのく
を薦とせと赤とくわやまとく鳳紀朝せんとせしも
假寐カタミと既ふ賊害をすなけれたる趙正卿ありま
をくもをく釣起くと一江山三へどを従ふくよ
胡林の九章あくぬもく天地と却くまゆも
あくづく釣聞くと今くとく孫くものくとて紀
めうれを自らの妙用あくと不謂老子云名を
まゆくとくのくこれも被るたまく釣聞く
こすく能目さむ能冥く性うやくみく脚も
勧めゆくかも魚あくまむ事ゆくてあわくや
以さん人是みまひ寔ふぞく行鷗大鵬のうけく

あくあくとあきふかひて恍惚として遂に釣寐
の意もああらか風起むとももいはれまく釣りまく
あらまことをあくのあくにわく天の釣竿と
竿しらをほまう無はれり有玉が居まくと
ひこも叟か笑ひて然既と見えり蓮臺の匂ひ
あつて多字治の納代ありゆき行方あくはそ
ありふがほされも候當お圓滿みこそ殆無為の
旨ミテかうりつと例の師カヨウもとゆまくか
忽忘をなまうれの

吹上國見平記

真洞

今年秋生れ未吹上未出仕難きまんと例の友
とち到るもよもじて釣スルももぬける糸柳の
鈎朗の釣の多羅引弛め是めやうせてあ見え
攀られ人えり。れと枝とをよぶ山かく
小屈曲をはね拵もよひあらひかけ岩かく
景のをも除ぬじて彼の三百七十室前の哥経傍
もまく思ひ縁へらん嘗あくとふ鳴りもじも
至得うはありそくれを遙小酒すの出神を
八重糞ヨシヅの衣あく山傍ゑの極小棚引加

葉のゆ拂シホをかくさ塙の山の夜已ふ利益の経を
なれ日づ川の絶ぬ流を端てありもハ白雲シロクモか
くれ寂寞ソラノとて危生濟度の法ハシキありまくら
和川以シテの譯ハタハタをあくめシテ題目シテのむり
を残シテすもれ川シテのせふらも荒川シテ
名シテすもれ芦川シテのあシテの經ハタハタも源シテ小く
橋シテ跡シテかくねを経シテよかシテあきをのつれ箇吹
登シテきくシテみゆめをかシテくシテ斤シテあひのこあくか
あくよきあそせ富士川シテの名シテふあくねても黒沢
山シテをめぐりて舟客シテのくろ新シテをかくシテ市
川シテの里シテかわ花シテ紙干シテあくま時シテむけ風情

あり朝シテ山平流シテひ流シテと希シテまくそくを在シテわくは
雲シテのたまきい峰シテめくらやうの脊中シテまくらえむに
處シテ悉美景シテをほほも自然シテあるわめシテてあくよ
感動シテさうふね竹シテの山シテそよ上シテまくと人シテもく
太山シテあお繁シテくちシテあひと先シテまの笠シテとかく
石シテをみれかシテく巖シテ時シテおシテは峰シテくらを以シテが
水シテをもシテあもシテ峰シテく石シテ木シテ疎シテかのシテとしと人の
音シテこへみ付シテて寂シテみ何んシテもひうちれハ谷シテ丸シテのゆく
吹シテよそを実シテ吹シテよとゆのあく

送鷹園主東遊序

静菅

一堂のうちにあるゝこそを軌坤の外ふ遊も
あむるゆゑと因人のともに志を空てあくされハ
古人も幻術の才一とみ以れりうかの一室の
草を賣る翁年三十からきて無人な境にて
かゝきのをえり竹馬をきて郷里不帰す
ある旅店に遇る方すの花をかりる刹那小
生涯の榮光をえりもよもれハ累々のみえ
るがおどろきばかりはあらひみをわへば一句小
魂の入てせまし鬼のやまとを以ふれ其魂を

おまよだとい招魂の法を傳ひとも元まひたと
やそく入つてきみのいはるさりふ櫻のあんや
まれハ崑山の玉光りやうひ恍惚とすまあの
体をうつす夫百景と稱す審とあはれ鬼の
其辛苦らも自作の妙術うつて以ひや世をの
修して金吉の園小耕さんとちよゆのちその實
地ふりてまたあらは景物を赤くめぐらすに
はそよんを悠幸す若もむるのとあん
鷹園の主家不釣りすわてもあみを活ゐの
並び久し三年又甲斐の毛羽小鞭を加へて
古翁の細工のわくをたゞ奥羽の勝槻を育得

せんすうをおほそむ。嗟乎あは舉手おけるむじ
今ふ感しとくらうと景と寓とも精神日以ふ
百倍。こそ有梦の画乃狀。かく書きを写し得
てん宣ようこそうらへや。予も形影ひふきりに
ゆきと今ま伏檻の歎ふ波にて居るふある
す。わざとせうて。錢組の吟もうあくもかひ
あく。居あく名區を想像され。革を
身たゞ風を捨るよりもよ。あけまくさて。あく
ほふ君と都三島の間平。翱翔して。まく鷹の
ところの遠す。すとわる。風光を弄。はり。あん
必代かく小國のりゆく。ふあくひて。をと族

みさだらふ。すあれたどひ松島象源の美景をそ
かく。しとも。喜士の舟めぐらす。早く帰鞍
きまく坐あまゆ

小築記

對山

それ家ふあり。まきをねまく。ひとく梯をまん
うあく。れいとづくは。けいと入をとみ。まやひ
心みまことあく。つめまわら。もわく。
吾まほ戸乃小庭。あた太山。あの竹。はちまゆの
僅小ぬ。ゆきとまわとをうく。つちうひ竹

姫みどりがおれのまくらふをひさうへまくら
りよせてもももとふ三疊のかくれ布をつくりて
觀修のじゆはあるとまくらむか小義素乃
墨の痕をまくらふのことうより卓ひとを爐皆
かくらふおは是あのれうたふ主とまくらぬ
まくらふのみ白炭のやうふをある
きのたゞりふをつまうきを兼あめれと風爐
平かべてもまきへしきをまくらのりをひはひり
はくづりゆくこととかるまむかくわりとそくも
ふうれいなまく彷ふ人ふとてあてまみくも
へまくらむをくすりをくふんゆあれへ兼砂

とも車を重みて昔年主家のまうちれまきはを
をかくもももももももももももももももももも
一家あれへあうされととあうあや嵐臺れを
ましつらめくのたくひ小やと笑ふ人もある
んうしも南港小築とりふれ不居のとそ
まみももう社友めくしの四字を兼醜ふ
鷇おくたうよりつひそれふすりせてかくふ
すふをあうぬあく澤姑をめつまうわやうの
戯きふ赤電子鷇私室あと書くもやうし
また似てさうふ免圓ら一かくほといまきや

自誠

護物

世よりのと形よ人も其を棄てをあすふ人も
乎ゆゑとせはちしめのひ一筋小刀を
うへ思ひ及あくひゆりも其就き候や首へき
地平坐よきものへ地ふよりとや
手も併れひそかあを業きけむる事アハ
たゞぬえをもあくうぬもめ
ありや舟平舟有松小虫虫にひとも虫ハ
芋ふきし菜虫を菜ふ生体采虫を蘆を施
といふハ采をあらわと云ふよりやあくも

たゞ酒虫をやく、猩々とあくもをう。寒、食ふ
虫の痕をとく。サモ鱗蟲、さうもくの虫の跡の
腱、巢と云ひもあられぬ。古の木樵山
ノ、燭拂の斧の柄も折れん。其と形ひみえも
空紙蟹うも葉も折ふひあき経年ふ苦ト
ゆれて鳥居守のむじの事ありやつもあく
ト。松の梢ふかく鷦の妻秋さくは草
子菴の竹子小行羽集す。交虫も接辦のタと
効くも蟻のくもる。塔も風ふ破き月ふ渭ふ
多岐の造化ふゆく。也幸ふとあくと一キよと
すとんとを欲すれどもひそかのくわ

虫有禦持小忍病の虫不見佛不見病の虫有伯夷
叔齊へ忠臣の虫ふうつまで首陽小死へ王送の
小町へ修業の虫ふううれて三毛の小さぬより
もみが絞の虫詫あせる紫あり何系の尼う
擣小机（佐木）と化（アキラ）ありれ
んおのれをそぞりよあううんふきううには
て彦れあるうあるく草を虫よ虫世を秋の能
のあきたのとも牛の家を離れ侘うの
虫の蓑も雨せりてものも本ほひをくとお自
身の子み一筋ふうけぬ（ミタニ）をあくす
後世のみちへゆく（アキラ）と角（アキラ）

住吉御田記

鶯笠

文政七年甲申臘月二十八日久留伊住吉御田
御田の事をうほやく（アキラ）かどりふりきちぢれこと
み小牛もぬき（アキラ）ひきあせや（アキラ）あせ
タれといぢれう（アキラ）宿おもねのまき（アキラ）をかう
て旅を（アキラ）はづけ（アキラ）岡と（アキラ）山とある（アキラ）
かの官居（アキラ）はまづ（アキラ）おねの本房もむ

きのとう人の紋ふふとひてこれとも見えりぬ
さてあそまの慶あよゆうはま宮けらきうちめ
くちあくへそおのもほをまらあくいむ
せきく神圓と名うるちの初めにほくまく
かづとあせとあはらひ幕をかくして御も
場をやうけとし社勢津ちか御居へと後も
うちへやあふねとひわかくと候るあく
とくとく日へ雲のかけとくやうれらむと
あくとくおはまゆはとのみさあくとあやう
そくみゆやうとゆのまぢひつとくとあ
か平車と車をあそにさうじ中央のとく翠簾

まく捲うどかくあみやせふ宮はふきもはとひ草味
の答盤を俱しうくか缺の禮杯をあくもみさの
歎を難波の皇嘗をわうあは君の警使からく
来きてかはやけの威儀を志多くまほのうと
のを別當お傍候の便ふとくはまくふあくふま
くちもつとくとも難色行司あとくきゆりと
あくとくをあらうけのもくろふをまき内き能をと
ものとくとくあるあく乳ちふだとのがはまく
のわくとくあれの例ありとくとくまほのみやいと
はやくふまく中ふみくしをもとてまくとくともあはえ

ぬもさうひつまくとを語りてはるる市女等の
うのからさうを賣ある者もとからわるを眉添不
賣ふせりあらひのめやかめわのとおれり
おるといとあまめうきせお夜の袖の袖のまゆふ
うれあみのうらせしとくもれうすあ筋もとけ
革ねうへすか祥縫下ちふりとあくと
あらはまくもれも縫としとあくとあをまくと
田糸法のあくとまとれりふれもまゆいとくとあく
そ衆徒白布のぬくめをみと見いだすうきら
やうあるふくまわはくらうしろまふあくと化る
考をひき白柄のち刀の鞘をうへあくと絞

ひうちうとあくとじとみのふあくとあくと縫
の毛あくとあくとゆらくとあくもそくにみ将内
生をあくほのあくと秋をくは卒をもと
くたうと縫うちのあくとあくせちあくも
せあくまくちへちほくと神田の壇を押すも
ワキくらかのあくけの場ふへまくと女子田樂ら
かくあみをくらむて床ルふしけと流徳と社勢のむ
ふくあみをくらむてあみの地の扇をさくうち
却くさくねくとこれもち刀をかくあくと模
さく手鏡をあくまに墨をちくにさくらうあ
社勢のかくねくまにわく手りうへとち刀

つてそとをそりつてまぢかたけくゆゑにあらわせ
るをさひの御つうじうとまもかくおはな放下
みあはれをもひなほせよに首あへてふひふく
さんをくわがうやうおやくわくあくひくわのせと
りあいとあそきのうんの将の生立あくる
むくらううちものをまくとくさくと太刀をひさす
車ひまひ坐て元どくかのまことちぬそもをまく
あくまくうまくあくとくをあくとてあくとくうらひ
らきいてやかくとほをのみくかあく会使とく
そと若狭へゆくと海とくと船と船と太刀もかおくで
あがりに入られかけしあがれしとくとくまく

ま枝の雪と宮殿ふ宿して少づもの巖をくく
とく
え波ハ松風ふまくべて津派の岡へよをあうと
うくうくふあくくとくあくのくくもくうち
あくと引をだらぬをぬをくやくとねを追な
くに廣あと種と種と角とくのかく追ぬまく追く
くと座ふとまくかよとやくは正もあくまくと
かくものくにうらやみと或とおとねかくよんく
わくかまくらまちをまくとがんとあそき出れとまくと
まくと松風とくせの變ふかへと簫歌とまくと
あともをあととやをぬくとあが母のけまくと
わくとみくうりすみ場みをかくとまくとまくと

といつも行さんかも

折箏銘

寥松

あくまがわふありもやかくあふ詠きあみ詠ひて
おもての眼のふちうへとそよごとまくらすゆふきゆ
狼カクももうへと極あられもありくもふもとくへ
くにゆふもとあかくねんまくらむやよかへし
まよ一元四千五百歳の春秋も瞬くあふるくら
あく思ひあまくひうみくとももろじともくへす
まくらせくはまきあくしゑ葉のたふ

起立のかくらひをと名づてあれとよいある
角調八尺四寸あるものをなからふ宿め造まで承れ
箏あり菊希明うかれふ成て忍ふ處の一宇を鷹う
峯太虛庵の墨迹を捨てて雕る憾らうと五つの
丸柱うこへて十二の調を其表あらわす
それともあらううひとみをかしての御筆といふ
わのすくとわのすくとよすくとよすくとよすく
あふるうとわのすくとよすくとよすくとよすく
かくら名づけよふあると有りふらをあらううゆゑ
津くして味あく今日の情ふかくもとすん

向くもつてひふをせぬまゝの簣
槌あづらんすも狂きぬへりあらまよと
吾ふかくをうへりとうちも破るべ思ひつむ
さくらに捨ててこそあらうふも無愁るれ候今
彈ともうをゆうしゆものれあまとしつとあ
しもや

峯鳴鳥辭

解字

序鷗をか齋の鵬を巣毛蟹を甲小仙令て穴
をうる鳥を巣毛のヨリふもあくは雲々

う一牛の体そむうけあさかの柄お匂いもや
盡む事の歌もす有面の情するわやあくうと
夜も秋の秋の月のゆけうみもうち帰して蘭
閨錦帳の裏をやぬとま縷の曉ちぬ軒を警
うし旗毛のゆめへやを啞くせよまうふふ祥を
啼て遠き傍の人をあとをせ因の夢のゆもむ
うわぬあゆひを抱き涙如雨と詠せても実
さをあらんかへりあれハ貞觀の帝ハ一枚小
かへて全樹小樓あらんときのまほひタマホも
あやみ君とこうくとせ情とつけしハか一あま
め三うきらん也そせくは翁のきさとを人の情を

すぬうれいわーとタへとあく糞ちのさうれを啄
牛るい腐肉を喰むととを黨をあうめ陣をあー
めうも市中お奠餅を縫ひ又ハ邑里の家相を
塙り小多き巢をうひあは其振轟ひわけそかくへ
まゝ能壯極現あうもーかハ林氏の鶴もうほ
きとかく先くかく汝う罪をせぬほも彼の斥鶴う
縛りふもあは後もも汝を免めかくすら笑
あて筆をさす

嘉永六年癸丑冬十一月補刻

江都

發行

書房

日本橋南壹町目

須原屋茂兵衛

淺草茅町二丁目

須原屋伊

八

同 茅町東中代地
野 村 新兵衛

